【56】

氏　名（国　籍）	申（しん）　昌（しょう）　淳（じゅん）（韓国）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　79　号
学位授与年月日	昭和56年12月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	**韓国語統辞構造の研究**
主　査	筑波大学教授　文学博士　小　松　英　雄
副　査	筑波大学教授　文学博士　安　井　　稔
副　査	東洋文庫理事　文学博士　河　野　六　郎

論　文　の　要　旨

本論文は現代朝鮮語の統辞構造について，独自の見解を述べたものである。筆者は，A. MartinetのA Functional View of Language（1962）と，彼の理論に基づいて現代日本語の統辞構造を研究したB. Saint-JacquesのAnalyse structurale de la syntaxe du japonais moderne（1971）とに啓発されて，母国語である朝鮮語の統辞研究を志したが，その研究は1）句及び文の統辞構造，2）文の機能的側面，3）複句形式の三区分が考えられ，本論文はその1）を取り扱ったものである。全体は4章から成り，第1章では統辞構造の基本的諸問題を論じ，その理論の具体化のため第2章において図解によって構造を明らかにし，第3章では補語，特に格についてその本質を究めんとし，主格・処格・造格について詳論し，第4章では助辞waについて独特の解釈を試みている。

第1章が本論文の中核になる統辞構造の理論を述べる最も重要な部分であり，第2章の図解法の説明の中にその理論の補足的解説がなされている。

第1章のIでは，言語構造を見るに当って単位を設定する手掛りを叙述に求め，その単位として句を考える。叙述語のある所に句があるとし，ここを構文論の出発点とする。そして「文はことばの流れの中の独立した個体」で，始まりと終わりを持ち，「句が終結すれば一個の文となる」と述べている（つまり，文は句の具体的な現れである）。

句は叙述語だけでも成り立つが，それだけでは不十分で，それを補充する補語が必要になることがある。補語の叙述語に対する多様な補充関係が格である。しかし格は直接統辞機能に関係しない。この叙述語と補語との句の主要な要素であるが，その各々を修飾する限定語と規定語によって句は

さらに拡大される。叙述語・補語・限定語・規定語は一定の機能によって句構成に参加する機能単位で，これを成分と呼ぶ。成分は機能と素材（構成素〉とから成る。成分は句構成の機能的単位としては窮極の単位であるが，その資料面の構成素は更に分析可能で，窮極的には単語と助辞が得られる。かく構成素は単語以外に統辞的構成体を利用することがある。それは節と連語の二種類がある。節は句を凝縮して句の構成素としたもので，これによって句はますます拡大される。この他に節になり得ない構成体として連語を考えているのが注目される。これは句以外の統辞構成から由来したものや通時的にしか説明できない構成体で，種々のものを含むが，この連語の設定は筆者独得の発想で，句の統辞構造の説明に弾力性を与えている。

第１章のIIでは独自の品詞論が展開される。筆者によれば，品詞は単語の機能範疇を指すものである。叙述語の機能を果たすのが用語，補語あるいは主題・属性などの機能をもつものが体言，規定語の機能を果たすのが冠形詞(日本語の連体詞)，限定語の機能をもつものが副詞である。ここで注目すべきは節と品詞との関係である。叙述語となる用言にいわゆる転成語尾を加えて作られた節はその語尾によって体言節，冠形詞節，副詞節を作るが，それらの語尾は用言という単語に付くのではなく，その用言を含む句を凝縮させて節を作り，その節の品詞を決定するとする。連語の品詞も同様である。なお，助辞はそれ自体構成素になりえず，統辞機能には直接関わりがない。したがって品詞分類には入れない。ただ，指定-ｉ-(…デアル）は用言とは別の品詞と認めている。

第２章では筆者の統辞構造の理論を具体的な文例について図解によって説明している。この図解ではIC分析や変形文法の階層的な図解法をとらず，言語の線状性の原理に沿って〝構成素の拡大という一次元的展開〟の図解法によっているのが特色である。

第３章は格を論ずる。補語の叙述語に対する関係は多様であり，その関係を規定するのが格範疇である。しかし格を示す格助辞は統辞機能を表示する標識ではない。それは話し言葉で主格・対格そして一部分処格でも格助辞なしで表現されることでもわかる。現代朝鮮語では主格・対格・処格・造格の四つの主要なものである。たいていの叙述には叙述される事の主体が前提されるが，その主体は印欧語のように不可欠な主語としてではなく，Martinet, Saint-Jacquesの説に依って主格補語として示され，格助辞ga/ｉが添加される（大略日本語の「ガ」)。この主格は環境によって具体的には種々の意味をもって現れるが，主体の表示ということで統括できるとする。対格の基本的用法は叙述語の表わす行動の働きかける対象を指すことである。その格助辞はruɯr/ɯr(大略日本語の「ヲ」)である。

次に助辞əｉ[ｅ]（大略日本語の「ニ」によって代表される処格と助辞roによって示される造格が論ぜられる。従来の文法書によるとəiは処格・与格・時間格・原因格・到達格・奪格・相対格等多数の格指示の助辞とされ，roは資格格・変成格・方向格・道具格・方便格等多くの格の標識とされてきた。しかしこれらの多彩性は環境による具体的な意味に目を奪われた結果であって，それぞれ基本的用法を統括できるとしその考察を進めている。結論として，〝əiは前に来る体言の意味を実体として示すという役割〟を示し，roは〝体言の意味の属性を示す〟とする。

かくて上の四つの格について統括し，〝主格の補語として指示されるものは，叙述語による叙述に

内在しているが，処格と造格で指示されるものは〝叙述が成立した後に外的に関与するのみである〟と言う。そして〝格はまず，内的限定の格と外的限定の格とに分類され，〝その各々は，前者は主格と対格に，後者は処格と造格とに下位区分される。

第4章は助辞wa（大略日本語の「ト」）の問題を扱う。従来の見解によれば，このwaは同じ形であるが二つの助辞とし，一つは共同格助辞で，もう一つは接続助辞であるとされてきた。筆者はこれに対し一つの助辞と見なし，それを並列助辞とする説を提出した。その場合もこの助辞の接する体言と叙述語の用言の意味によって文脈的には種々の意味にとられるが，基本的には〝すでに言及されている体言にそれと統辞的に全く同じ資格の体言をさらにつけ加える〟並列の助辞を見なすことによって解釈し得ることを論証している。

審　査　の　要　旨

朝鮮語の文法研究は，その日なお浅く，最近ようやく活発化してきたが，多くの基礎的作業が残されている。殊に朝鮮語の特色を生かした文法理論は未だしの感がある。一般に，従来の文法理論は印欧語を基盤として考えられたもので，朝鮮語や日本語のようなアルタイ型の言語の記述は必ずしも適切ではない。本論文はこのような型の言語の特性に沿った理論を構築せんと試みたものとして評価できる。

形態論的特徴が全く統辞構造の原理に支配されているアルタイ型言語の考察は何よりも先に統辞構造の分析がなさるべきで，筆者がまず句から発し，その成分の探究から叙述語・補語・限定語・規定語の機能単位を見出したのは当を得た処置であり，そしてその機能を果たす構成素としてそれぞれ用言・体言・冠形詞・副詞の四つの品詞を設定したことは従来雑多な基準によって考えられて来た品詞論に比べて極めて明快である。句の構成素は単語だけでなく，節および連語という概念を導入して，構成素の拡大を説明し，しかもその拡大が言語の線状性に沿って一次元的に展開することを図解によって明示しているのは注目すべきである。なお，筆者も言っているように，朝鮮語の統辞論としては，主題―説明の理論の適用や，用言の構造などの重要な問題が残っているが，その解明は今後に期待したい。

本論文の後半，第3章および第4章は助辞についての考察で，いずれも文脈的に多様な意味に解される助辞の統括的解釈を行なっており，その助辞の接する体言の性質，その体言が補語となっている叙述語の用言の種別などにより醸成される環境を詳細に見極めて，統一的意義素を抽出しようとしている。この試みは第4章の並列助辞の場合は成功しているが，第3章の処格・造格の場合については，さらに考察の余地が残されている。

以上のように，本論文は，将来の研究にまつべき問題点を含みつつも，その目的はほぼ達成されており，本格的研究の緒についたばかりの朝鮮語研究に大きな刺激を与えるものである。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。